「第１回乳幼児の父親についての調査」結果をみて

恵泉女学園大学大学院教授　大日向雅美

数年前、当時の厚生省が「育児をしない男を父とは呼ばない」という、衝撃的な内容のキャンペーンを展開して、話題となりました。当時は、「なぜ男が育児をしなくてはならないのか？　男性にとって一番大切なのは仕事ではないか」という反論が大方の男性に支持されていました。今回の調査結果をみると、父親たちの育児参加の実態は着実に変わってきています。「子煩悩で、よい父親になろうという気持ちをしっかり身につけた父親たち」が出現していることが調査結果から読みとれます。短期間にこれほど劇的なまでに男性たちの考え方が変わったということかと、調査結果に強い印象を持ちました。

まず、８割弱の父親が、立ち会い分娩を希望し、半数以上は実際に生まれる瞬間から立ち会っています。生まれた後の子どもとのかかわり方をみると、勤務状況が厳しいと想像される世代だけあって、平日の接触時間はさすがに少ないのですが、それでよしとはしていません。大半がもっとかかわりたいと希望し、休日は半数あまりの父親が10時間以上、子どもと一緒に過ごしていると回答しています。「自分は子どもの相手をよくしている」という自負を持っているのも、もっともなことと思われます。かつての父親は育児にかかわらない抗弁に、“結局、子どもは母親になつくのだから”と、一見もっともと思われるような理由をあげたものですが、今回の調査結果をみる限り、この種の嘆きを口にしている父親は数パーセントにすぎません。

わが子にしっかり向き合おうとしている若い父親たちの出現に、まず好感を持ちました。しかし、若干、気がかりな点もあります。父親たちの心の中で妻がどのような位置を占めているのかという点です。

「安心して一緒にいることができる人」として妻を選ぶ夫は８割近くいる一方で、「満ち足りた会話をすることができる人」「自分の考えや意見を率直に交わし合える人」として妻を選んでいる夫は６割弱に減っています。さらに「つらいとき、こまったとき、相談する人」として妻を選んだ夫は半数程度となっています。

この数値をみて、思い出されるのが、「夫は育児に協力的なのに、なぜか寂しい」と育児相談の場で訴える妻が最近増えていることです。育児に追われる日々の中で、いつしか一人のおとなとしての自分を見いだせなくなっている寂しさ、社会から取り残されていくような焦りに妻たちは悩んでいるのです。職場などの社会的な活動の場で、人として遇される機会に恵まれている夫にとって、一日の大半を幼い子と向き合い、おとなとしての会話もままならない環境に置かれている妻の胸中は、なかなか想像し難いことでしょう。しかし、互いに意見や考えを率直に交わし合い、何かの時には相談相手として選ぶか否かは、妻をひとりの

人間として、人生の対等なパートナーとして認めているか否かにかかわる重要な問題です。少なくとも、妻たちはそういう思いで、夫の胸中を探っているのです。

今回の調査結果は、かつての父親に比べれば、子どものことを懸命に考え、かかわろうとする父親たちの人間宣言のように受け取れます。しかし、本当に父親たちが望むように家族から「頼りとされ」「尊敬される」父親となるためには、妻とのパートナーシップにいっそう努力を払うことが今後の課題のように思われます。